常葉大学造形学部
紀要　第15号・2017
山本浩二
YAMAMOTO Koji
2016年11月18日 受理

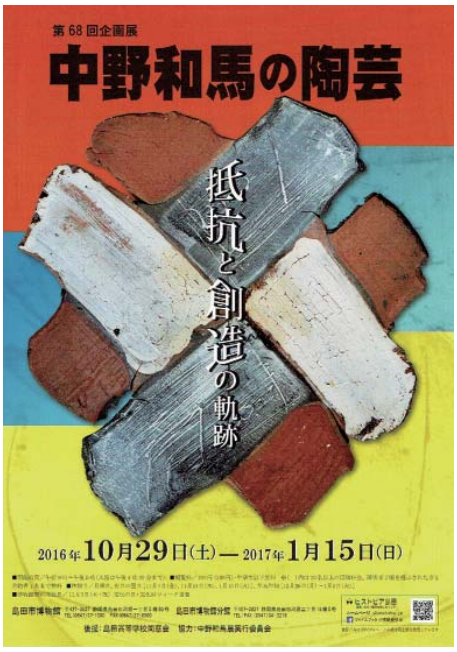
中野和馬の陶芸―抵抗と創造の軌跡―

Kazuma Nakano's Pottery : The Path of Resistance and Creation

キーワード：
中野和馬
陶芸
スリップウエア
島田市博物館
博物館講座

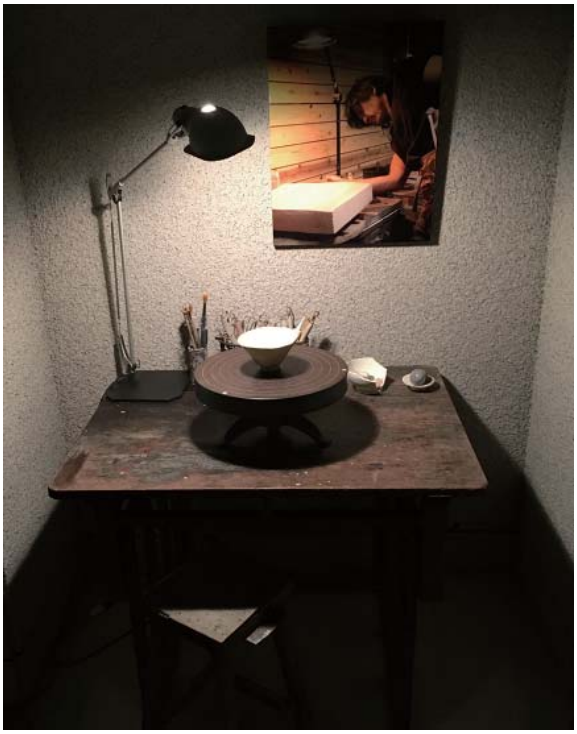
2016年10月29日（土）～2017年1月15日（日）
島田市博物館　本館および分館（版画記念館）
主催：島田市博物館　協力：中野和馬展実行委員会

中野和馬は島田市出身の陶芸家である。2009年に42歳の若さで急逝し、今年で没後7年となる。 2010年に島田市博物館分館で第1回目の回顧展が開催され、2013年には駿府博物館、そして今回で3回目の回顧展となる。本展では筆者が展示デザイン及び設営と博物館講座での講義を行った。



中野和馬について

中野和馬は1966年丙午年に島田市金谷にある茶商カネツ中野園の長男として生まれた。大学卒業後は商社に勤務するが退職し、ほどなくして作陶を開始する。大学在学中に知り合ったデンマーク人Jorgen Enstromとの縁により、オーフスにあるアートアカデミーにおいて陶芸を学ぶ中で北欧の色彩豊かなデザイン感覚を身につけたと思われる。帰国後は鯉江良二氏に師事し、豪快で奔放な陶芸の魅力を知ることで作風が変化し続け、次第にスリップウエア（化粧土）と鮮やかな色彩による作品スタイルを確立していく。東京渋谷の黒田陶苑でも個展を開催するなど若手作家として活躍していたが、2009年に急逝した。

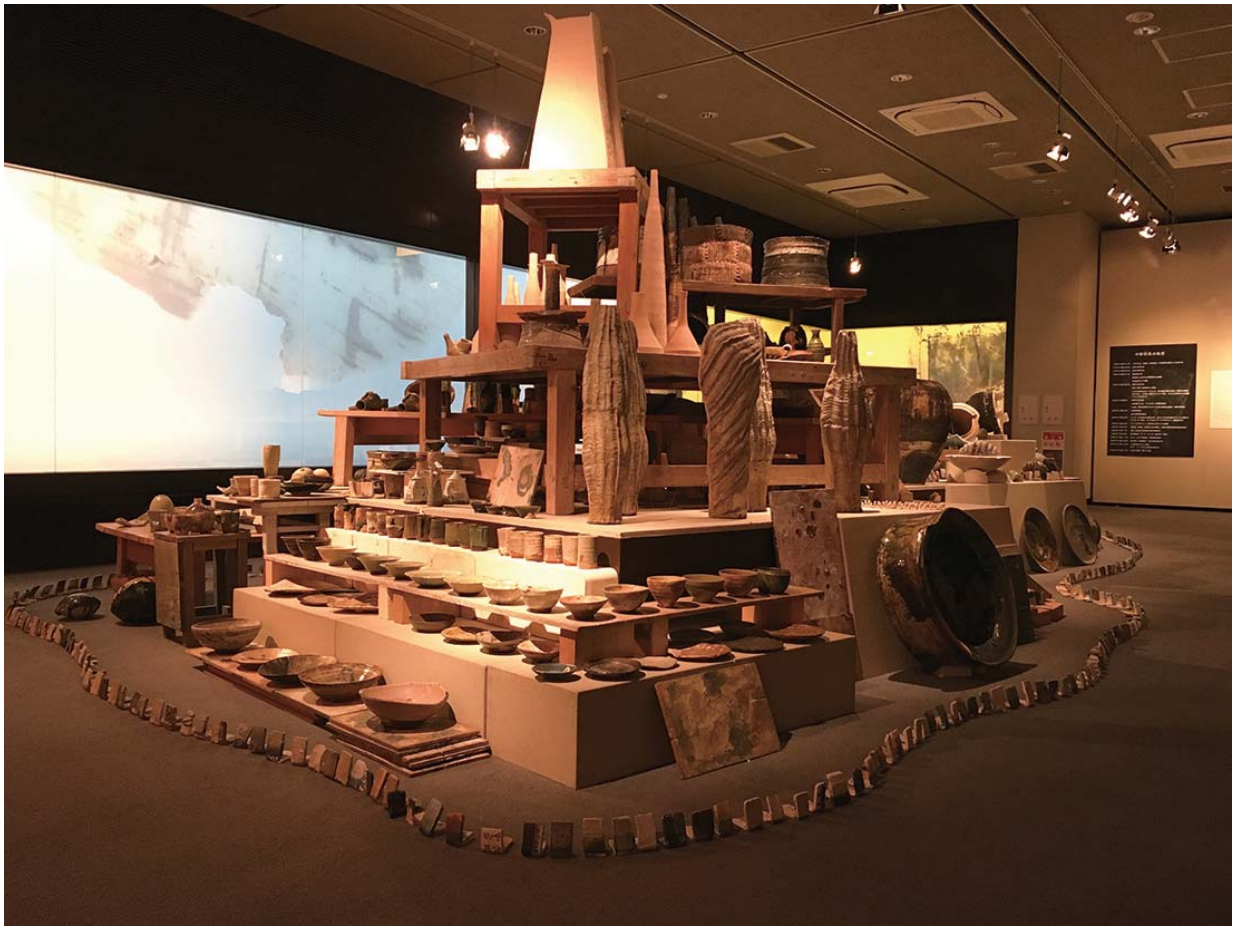


展示内容

本展は島田市博物館本館２階展示室と分館版画記念館の２ヶ所での展示である。「抵抗と創造の軌跡」というサブタイトルにもあるように、中野和馬は日本の

伝統的な陶芸の範疇に収まることなく、自らの作品世界を大胆に打ち壊して創造的な陶芸を目指していた。本館2階展示室では中野和馬の初期から中期にかけての織部釉による作品をはじめ、鯉江良二氏に師事したのち、作風がダイナミックに展開していた時期のものを展示している。展示室の中央に築かれた作品の山はいわば墳丘のようなものであり、中野の「抵抗と創造の軌跡」そのままに、彼が展覧会を通して作品として世に送り出したものから破損や失敗作として打ち捨てられたもの、工房で使われていた机や椅子といったものも寄せ集められている。そのため1点ずつの作品キャプションはなく、この山全体が一つの中野和馬作品となるよう計画された。

分館版画記念館では主に後期のスリップウエアを主体として制作された作品群を展示し、壁面には回転する器の映像を投影した。様々な器の明るい面から暗い陰へと変化する様子を撮影し、作品の質感を強調させるとともに、形の歪みと模様のつながりが読み取れるような映像とした。陶芸家はろくろの上で形を作り、施釉の際にも器を回転させて出来上がりを想像する。ゆっくりと回転しながら交錯する器の映像によって、鑑賞者が陶芸家の目に近づいていくことを意図している。プロジェクターは2台使い、それぞれ異なる映像を流すことでリズムに変化をつけ、あたかも器が踊っているかのような印象を作り出したいと考えた。ワックスがかけられた木の床面に映像が反射し、水面に映り込むような効果を上げているとの感想もあった。また壁面を隔てた隣の展示スペースでは暗闇の中に照明



付きの展示台を一直線に並べ、中野作品を代表する色鮮やかな作品を配置し、静謐で荘厳な雰囲気を演出した。

本館２階展示室に入る手前には中野が生前使用していたろくろの上に色鮮やかな施釉がなされた本焼き前の作品が展示された。様々な葛藤の中で中野が最後に見つめていた作品ということになる。

博物館講座　「中野和馬の陶芸について」
講師：常葉大学造形学部　准教授　山本浩二
開催日時：11月20日（日）13:30〜15:00
場所：島田市博物館本館２階　講座室　約50名

講座内容

2013年の駿府博物館での講演では、主に中野の作品の特徴であるスリップウエアとテクスチャーについて講義した。今回は彼の陶芸作品の形態的な面に焦点を当てて考察するとともに、オーソドックスな陶芸における造形プロセスとの比較の中で解説した。

例えば高台とは器の底部を安定させるための輪状の形態だが、機能としては水平な台に置くときに器を安定させるということ以外に、熱いものを入れた器を持つときに指で支えることができるという点も重要である。ろくろで回転体を挽いたときには器の腰の部分を厚く作らざるをえず、切り離して乾燥させた後にこの厚みを削って整えなければならない。このことが器における高台作りの工程をパターン化させているわけだが、実は高台は形態的には最も遊びの余地がある部位でもある。一般的に焼き物はまず見込みと側面が見えてくるが、高台もまた見所の一つである。中野の作品には高台における大胆な造形が数多く見られる。碗でも皿でも中野は高台を含む裏面のデザインに非常に気を使っていたことが伺える。

鯉江氏に師事する前後で大きく変化したのは土の表情を最大限に引き出すという点である。釉がけの大胆さだけでなく素地に対して削り、引っ掻き、引きちぎりなどフォルムの歪みをものともしない強い力によって土の魅力が現れ、織部釉の濃淡がそれらをいっそう引き立てている。「素焼きの段階で形が良くない焼き物は、どんなに頑張って装飾しても良くはならない」と本人が話していたように、奔放な造形の中にも美しいシルエットを常に追求し続けていた。

その他矩形をベースとした構成の特徴や器の各部位に対する観念を打ち破ろうとする造形性などについて、スライドレクチャーの形で講義を行った。

参考文献
鈴木善彦　『中野和馬　青春の彷徨』　中野喜朗発行　2014年